

『盗まれた手紙』において「盗まれた現実界」と、 その抑圧の回帰としての読解の共犯性について

檜村 愛子

Abstract

I will analyse the relation between the texts, which are Lacan's reading of Poe's text "The letter stolen", Derrida's reading of Lacan's this text and Johnson's reading of Derrida's that text. There is the complicity of reading as the return of the repression of "the réel".

1. 文学的読解における転移

エクリチュールは作品（テキスト）として閉じ一つの世界を形作るが、一方でそれは読解を通じて新たなエクリチュールや作品（テキスト）を産出させるような開かれた場でもある。しかしエクリチュールが人間にとって症候として成立している事態においては、症候の読解が新たな症候を形成し直す可能性もあるだろう。

本編は、ポーの『盗まれた手紙¹⁾』、その読解であるラカンの「〈盗まれた手紙〉についてのセミナー²⁾」、そして再びこの読解である、ラカン批判として書かれたデリダの「真実の配達人³⁾」を比較検討することで、この読解史の中でそれぞれのテキストが前出するテキストの矛盾（症候）を開示しつつも、それをまた異なる形態において継承しある意味では強化している様態、すなわちテキストの抑圧物に対する読解および批判がテキストにおける抑圧物の回帰として共犯性を持っている様態を提示する。またそこにおいて文学的読解の限界を指摘しうる新たな科学的生産としての読解を提示する。すなわち、盗まれた手紙が対象 a の形でその彼方に半ば保持していた現実界の動きが、登場人物である神経症（ヒステリー）的主体の機制の中でだまし取られ抑圧物として機能していくこと、そしてその事態は結局読解史において転移され強化されていってしまうことを、ラカン、デリダのテキストにおいて検

討し、『盗まれた手紙』の科学的読解を提示したい。

ここで科学的読解といったのは、従来の文学的読解がテキストに対するある種の「転移」を前提にしている（ゆえにこそ読解の共犯性が成立するのだが）のに対し、科学的読解においては転移を前提としないこと、および読む主体（の快楽）も排除しているということの意味する。それによって科学的読解は、文学の外部つまり文学を成立させている主体、文学およびエクリチュールが担ってきた症候としての機能、文学およびエクリチュールが現実界と取り持つ幻想等の問題を開示しうる可能性をもつ。

ここでそれゆえ文学的読解としてのディコンストラクションと科学的読解の差異も明らかにしうるだろう⁴⁾。ディコンストラクションが文学的読解の内部にとどまろうとする欲望を維持しつづけること自体が、ディコンストラクションのある種の限界を設定していることが明らかになるだろう。すなわちディコンストラクションが意味作用の不決定性のみをテーゼとして、意味作用のみを相手にし、意味作用における同一性なりそれを保証している幻想を批判しているだけでは、その内部において抑圧と抑圧物の回帰がおこっているのみであり、意味の外部を提示しえないこと（意味の外部という幻想しか提示しえないこと）が明らかになるだろう。また一方ではラカンが、「論理的時間⁵⁾」のような分析的言説を提示しているにもかかわらず、ここでは彼自身テキストに引きずられ、現実界を抑圧した倒錯に陥っている様態を提示したいと思う。

2. 現実界の抑圧とシニフィアンへの幻想

では、当の手紙から考察していこう。手紙の意味内容は読者にも登場人物にも知らされていない。わかることは、それが王の権力と秩序を脅かすものであること、と同時にそれは新しい権力を創成する可能性も持ったものであるということである。これは、大文字の他者としての王に対する無意識の審級を代表していると考えられるだろう。王妃は、この手紙を読みかけのまま王の前で隠す必要に迫られ（＝抑圧）、しかもそのままその手紙を大臣に盗まれてしまう。ラカンおよびデリダによれば、手紙は、その意味内容において機能するのではなく、形式においてすなわち物質性において自律的に独自に（シニフィアンとして）機能する。しかし事態をみていくなら、手紙は、王を中心とする権力システムの攪乱要素でありながら、破棄されることも分割されることもなく、人々の欲望を導いていき（＝盗まれていき）、逆に王の権力システムを表象しそれを誇示するかのよう動いていく。ここがデリダの批判点である。ここにまず、手紙の規定における、シニフィアンと抑圧物の混同があるだろう。

確かにシニフィアンは、主体を外傷的に措定し去勢するものであり、ここで手紙はまさにそれぞれの人物の場所を意味作用の外部で手紙の内容に関わりなく規定し、主体の意志の統御を超えたところで主体を操っているように見える。がしかし一方、手紙は抑圧されるべき

対象であるという規定とともに、すでに王権力のシステムの内部で動いており、そこには王権力そのものを脅かすような外部の動き、例えば手紙を読むことは、人々のまさに盗みと保管の利益をめぐる行為の連続において封じられている。すなわちやはり主体を操っているのは結局のところ王権力であり抑圧は強固であって、ゆえにここで措定される主体は、シニフィアンによって去勢され生成される原初的主体ではなく、大文字の主体（ここでの王権力）の幻想にしがみつ়くことで外部を拒否する神経症の主体である。

そこでの登場人物のふるまいを見ていけば、王妃に対して大臣は、また大臣に対してデュパンは、相手の欲望の対象物となることで自らは欲望（＝手紙を読む欲望）の主体であることを忌避していることがわかる。彼ら自身は手紙に魅惑されてはいない（＝興味を持っていない）。すなわち王妃の抑圧の効果として産出（この場合は、再生産なり強化）される王（＝大文字の他者）の権力が問われ疑われることなく利用されるのである。

ここで確かに原初的に主体の生成を見ていくと、シニフィアンによって主体として措定された後、そこでは主体は、大文字の他者の幻想に支えられてシニフィカシオンの世界の中に参入する。がこの大文字の他者とはここで事後的に形成された幻想物であり、シニフィアンとして措定された享楽の時点においてはもともと存在するものではなく、去勢において享楽が再演されることによって解体されるものである（＝脱神経症的状态）。そして手紙がシニフィアンとして機能することがあるとすれば（手紙をシニフィアンと規定しうる様態がおこるとすれば）、すなわち人々の抑圧がなく去勢＝享楽がおこるとすれば、それは王妃によって中身が読まれ、手紙が王の権力を覆すような新しい世界の隠喩として機能するときであろう。

ここでデリダは、手紙＝シニフィアンの分割不可能性、およびその経路中における手紙＝シニフィアンの消失の不可能性に対して異議を申し立てており、それはファルスに散種を対置させる彼の根本的なラカン批判の文脈の内にある。先にみたように、手紙は王の権力システムの一部として機能する、つまり手紙が対象 a の形で保存している現実界のふるまいが切り捨てられ（抑圧され）ファルス⁶⁾として機能するのであるから、その意味においてはデリダの主張は正しい。実際には手紙がシニフィアンであるならば、現実的な物質的存在であり、享楽（新しい生成）を可能にする歴史的＝個別的存在であろう。とはいえ、デリダの散種のパースペクティブから提示されるような、主体からは自律的に存在しその自律的動きにおいて主体を多様に意味づけていくかのように見える手紙とは、この現実界の抑圧された世界の内部に存在可能なのだろうか。

バーバラ・ジョンソンによれば⁷⁾、デリダは、シニフィアンのアレゴリーとしてのこの小説のラカンの解釈には異議を唱えていない。つまり、この設定内部でのデリダ的な手紙の存在可能性はまるで疑われることなく、デリダの批判は、ラカンの説明において、手紙が王のシステムの一部でありその経路が規制されているファルスである点にのみ向けられている。デリダにとって、主体が意味の余剰（対象 a）の魅惑に捉えられる様態は、手紙の開封（こ

の中にこそ享樂を与えるシニフィアンがある) すなわち現実界との関係においてはとらえられていないのである。つまり現実界が抑圧されたままであっても対象 a は可能であり、ファルスが分割さえされれば経路が固定されてさえいなければ問題は無いかのように、彼は語っている。彼が問題としているのは、この手紙が全体性を体現し(分割されえず)ファルスとして機能するというのみである。

しかし重要なのは、手紙が真に力を持ちうるとすれば、すなわち手紙において父の名の隠喩が機能するとすれば、システムの外部(現実界)との関係においてであるということであり、手紙が半ば王妃に欲望を与えつつも、その後次々に盗まれていくことでこの可能性が封印されてしまったことこそ告発の対象とすべきであろう。対象 a とは、シニフィカシオンの内部において意味作用を持つと同時に現実界の享樂の動きをも再演しているものである。王妃がこれに魅惑されることおよび欲望をもつことが奪われ、これを奪う大臣は自らは欲望を持つこと(去勢)を拒否して王妃にとっての対象 a となる。ここでは現実界は抑圧され、デリダが想定するような意味の余剰としての魅惑も抑圧されてしまう(後はただ抑圧されるべき対象でしかない)のである。とすれば、抑圧を支えているファルスが分割されることは、ますます登場人物達にとって不可能となり、それはますます多額の金によって死守されることになる(=抑圧の強化)。つまりデリダ自身、享樂は拒否しており、ファルスという幻想以外の幻想、多数の幻想(?)を持ち出すことで、一つの巨大な幻想を無効にしようとするかのようである。しかし、しよせんシニフィカシオンの内部である限り、シニフィカシオンを成立させているファルスの支配下に入らざるをえず(でなければ夢のように主体を欠いた場所で部分欲動の幻想へと退行するか?)、意味の外部を問題にするのであれば、現実界へと通じる場所が確保されていなければならない。

デリダはラカンが手紙を真理に、すなわち意味の欠如を欠如という真理にすりかえた事態を批判すると、バーバラ・ジョンソンはいう。しかしここで起こっていることは、真理の存在を主張する(ただしラカンにおいては倒錯という形式において)立場と、真理の存在が不可能であることを主張する神経症的立場が、いずれにおいても真理の外側に存在する現実界の様態を抑圧(倒錯においては否認)している事態だろう。なぜシニフィアンないしはエクリチュールとしての手紙が分割可能となり自由な運動が可能となるのか。それは、シニフィアンと関係する主体の問題を抜きには論じえないはずである。一方で、盗まれた手紙の軌跡そのもの(なぜ常に手紙は盗まれるのか?)には手を触れず、手紙の分割不可能性およびその回収先のみを問題にするのは、ポーないしラカンがすでにつくりあげている去勢を免れた機制の中でその利益に預かりながらも、彼らを批判することで自らが去勢を免れていることを隠蔽しようとする、神経症者のふるまいにすぎないのではないだろうか。これはもちろんバーバラ・ジョンソンにおいても同じであろう。

3. ディコンストラクションの限界とラカンの倒錯

ここにはディコンストラクションの本質的な欠陥が観察されうる。ディコンストラクションにおいて、真理という問題圏は、意味作用の内部のみで語られ、真理が存在することがまるで悪しきことかのように権力と結合されながら告発される。しかし、真理とは実際、享楽という現実界の作用によってのみ想定可能になるのであり、この作用は、主体自体を構成しているものでもある。デリダ等が真実を問題にすると、真理そのものを可能にしている物質的動きは射程に入れられていない。彼らが問題にしているのは、享楽の瞬間を遡行的に構成した幻想であり、彼らは神経症的にこの幻想を封印しようとする。しかし他人の幻想を批判することそれ自体、やはり幻想にすぎないのであって、重要なこと、問題にされるべきことは、絶対的に肯定されるべき現実的真実の方なのである。

一方、ラカンをみると、彼はこのセミネールを象徴界の説明であると同時に反復強迫の説明として提示した。つまり彼は、象徴界＝反復強迫として両者を同値のものとした。この彼の誤認＝倒錯がなぜ導き出されたかということを考えるとき、逆にこの事態は、彼が反復強迫に深く魅かれていたことを提示するものである。デリダが批判するまでもなく、初期のラカンにおいて構造主義の影響下のもとで定立された大文字の他者Aは、後期のラカンでは線を引かれ（ X ＝真理はない）、さらに「他とは他の性である」と規定し直され、ファルスの特権性は解体される。でありながら、デリダがはからずも嗅覚を働かせて読み取ったように、ここではラカンの大文字の他者に対する幻想が倒錯的に展開されているようにも思われる。

反復強迫とは、享楽が不可能になったときに起こる運動である。すなわち享楽とはそれまでの主体という情報体の関数が新しい関数と結合しそれに代入されてより高次で新しい関数になる状態であるとすれば、反復強迫は高次の関数が出現せず循環論法に陥っている状態であると記述しうるだろう。しかしここでは全体を巡るパラドクスが生じる。つまり高次の関数が導入されるのはじめてそれまでの関数を全体として見渡すことが可能になるのだが、一方そのときにはすでにもとの関数以外のものが導入されてしまっているものであり、逆に全体化は不可能となってしまう。ゆえに全体性を保持しようとするならば、たとえそこで起こることは無意味であれ、循環（ファルスの）であれ、内部においてのみ情報を処理しようとする過程が最善なのであり、そこにラカンにおける幻想としての全体性の保持（＝倒錯）があると考えられる。

こうして彼は、ファルスの循環、全体としては無意味なものが無意味でありつつ、なお無意味という形でシニフィアンが連鎖反復するような様態を自らの特殊な対象aとしているのである。そしてこの動きを支えているのは、まぎれもなくニセ女⁸⁾としての神経症者達である。つまり真の女性は、自らの意識＝主体を抵当に入れることで享楽の只中に入り、その瞬間大文字の他者となる⁹⁾が、ニセ女は意識を片手で握ったまま、自らドラマの制作者として

大文字の他者あるいはその相関物としての対象 a の場所に立って全体を開示しようとするので、そこでは父の名の隠喩（享楽）はすでに存在している自明な構築されたシニフィアンの無意味な回帰としてしか生じない¹⁰⁾。

さらにラカンのこの誤謬をみていくな、ラカンが、このセミナーを「論理的時間」の問題との類似において論じようとしたことに注意したい。ここでラカンは、「論理的時間」と関係づけながら、諸主体間の想像的な間主観的干渉と、そこからの飛躍および新しい次元としての象徴界の設定というテーマを論じようとした。ポーの原文には主体間の想像的關係は示唆されているが、そこでは本来は力の優劣が決定不能な想像的關係がすでにどちらかの知において優劣が決定済み（子供の丁半遊びの例を出しながら、明示的に推理力の差異を語っている。またそこから結局、この物語そのものが、デュパンを、そしてこの作者のポーを、最も賢い者として想定している）となって解消されている。ラカンは、そこに介入することで、ポーによっては排除されている、彼らの間を循環する手紙の力を明るみに出し、逆にこれを物語の主人公として立てるというプロットをつくったのであろう。すなわちそこには想像的次元を超える象徴界の設定への意向があり、ポーの世界においては、「想像界の中での支配者」＝「推理小説の中での謎の開示者（デュパン）」＝「推理小説という形式において真実を知っていると想定された作者（ポー）」の絶対的力は否定される。デュパン＝「知を想定された分析家」はなんら特権的存在ではなく、彼もまた手紙（この想定においてはシニフィアン）によって去勢される存在なのであり、手紙を保管することでその人は女性的になると記述されるのである。こうしてシニフィアンの前での人々の絶対的無力さがむしろ叙述される。しかし問題はシニフィアンと想定されたこの「盗まれた手紙」であった。「盗まれた手紙」はシニフィアンとして機能する（開封される）前に盗まれ、その盗みの意図において対象 a として機能する可能性も奪われてしまう。ここでは人々は抑圧物の周回の中で神経症的主体として設定されるしかないという事態を、ラカンは、手紙のファルスとしての動きに魅惑されることで、見誤ってしまった（見抜けなかった）のではないだろうか。

「論理的時間」においては、囚人達は皆同じ場所に立たされており、誰も外部に立つこと、外部を見通すことは不可能であった。これが想像界を表象するものであり、この内部にいる限り依然メタレベルに立つこと（もちろんメタレベルに立つこと自体不可能であるが）は不可能である。ここから抜け出するためには決断としての行為（分析）しかなく、決断と行為こそが彼らを外部に解き放ち、自由を与えることを可能にする。しかしこの「盗まれた手紙」においては、人々は同じ場所に立たされてはいない。大臣は王妃の、デュパンは大臣を見通す場所に立とうとする。これは、イデオロギー批判の連鎖の誤謬と同値である。ポーの小説全体は後の人が前の人を、賢い者が愚か者を見通せることの説明を構成している。ラカンはこれを覆そうとした。それ（見通せること）は単に転移の効果であること、手紙との位置の問題でしかないことを語ろうとした。つまりデリダが指摘したように、そこには知＝真実は

『盗まれた手紙』において「盗まれた現実界」と、その抑圧の回帰としての読解の共犯性について

ないことが手紙の絶対的力において示されたのであった。こうしてポーの幻想は覆された。しかし一方で、そこでは決断＝行為としての「真実」の創成＝享樂（しかし現実には常に享樂とは外傷のようにしかやっこないで、厳密には行為＝享樂ではないが）までが否定されることになった。「論理的時間」と対比すれば、そこでの外部（現実界）の排除は明らかである。彼らのいる場所全体を名指す可能性を持つ手紙は、封印されたまま「ラカンの真実」を支えつつ周回するのである。そこには最後まで何も起こりえず、誰も手紙の開封＝決断＝行為を行えない。デリダは、ポーの知＝真実を覆すような、ラカンによる手紙の力の評価そのものには同意しつつ、このラカンの閉じた全体世界については批判した。しかし、デリダにおいても世界＝真実を立ち上げる現実的な享樂の作用そのものは対象とされず、結局のところ現実界の抑圧という点においては、ラカンの図式は補強されることになったのである。

このように、「盗まれた手紙」において、最初に現実界が盗まれてしまったことは、批判的読解を経由しつつも、最終的にはラカンおよびデリダの読解における現実界の抑圧という共犯性によって継承されてしまったのではないかというのが本論の結論である。

注

- 1) Poe, E. A., 1951, *Great Tales and Poems of Edgar Allan Poe*, Pocket Books
- 2) Lacan, J., 1966, *Le séminaire sur «La Lettre volée»*, *Écrits*, Seuil
- 3) Derrida, J., 1975, *Le Facteur de la Vérité*, *Poétique* 21
- 4) しかし私見では、ここでいう科学的読解すなわち文学の外部に立ちうる文学や批判の可能性はあると思われるが。
- 5) Lacan, J., 1966, *Le temps logique et sur le transfert*, *Écrits*, Seuil
- 6) むろんファルスは対象 a の一種であるが、この場合は、純粋にシニフィカシオンのレベルでの、全シニフィアンの抑圧物として大文字の他者の幻想を可能にする限りでのファルスを意味する。
- 7) Johnson Barbara, 1978, *The Frame of Reference: Poe, Lacan and Derrida*, in *Psychoanalysis and the question of the Text*, *Yale French Studies*, no. 55-56
- 8) 真の女性は、無意識として存在しうるが、ここでの大臣やデュパンは、欲望を持たぬふりをしつつ、王妃が手紙を欲望するというシナリオの作者として去勢を免れている。
- 9) 「他とは〈男にとっての〉他の性である」とはこのことである。
- 10) ラカンは女性をこよなく愛したが、ここではニセ女さえ愛しているのである。またもしデリダが真に女性を把握していたなら、ここでのニセ女の問題を指摘したはずである。しかしデリダにおいては、女性は常に「偽装する女性」でしか、すなわち欲望との関数でしか存在せず、享樂の領域へと踏み越えていく女性の様態は、叙述されえない。ゆえにニーチェが引用されつつも、永劫回帰（享樂）は叙述されえないのである。